

施設機械の売込合戦と酪農家の選択

岡山県岡山地方振興局 橋本尚美
(アドバイザーNo. 1154)

◆はじめに

家畜排せつ物法が制定された時、やばいと思ったのは畜産農家だけでなく、この私も同じでした。これまで補助事業を実施する時に規模積算書を作成することはあっても、実際にふん尿を処理した経験もなく、農家へ指導できる程の技量を持ち合わせていなかったからです。

施設を整備してもうまく処理できない場合の原因は何なのか？ 自然流下式やフリーストール牛舎の場合、農家に最も経済的負担の少ない処理方法は何なのか？ 畜産経営の厳しい状況が続く中、施設投資の失敗は許されないというのに、このままでは農家の疑問に答えることが出来ない。

そんな時、畜産環境アドバイザー研修を受けた同僚の話聞き、何がなんでも受講しなければと思いました。そして幸いにも昨年の8月アドバイザーの資格を得、今は畜産農家の相談にある程度の自信を持って答えることが出来るようになりました。以下は新米アドバイザーの奮戦記です。

◆業者の売り込み

管内のA町は酪農の盛んな地域ですが、ほとんどの酪農家に処理施設はなく、平成16年11月までに施設を整備しなければならない状況にあります。そこで農家に各々の経営に合った処理方法を選んでもらうために、施設機械の業者による説明会を開催することになりました。初めてのことで過去県内に実績のある数社のみで実施しましたが、説明会の後も、農家が集まる機会等に依頼していない業者が度々訪れることになり、業者数は8月から現在までの約半年で14社となりました。

各社の施設機械はバラエティーに富んだ構成となっており、開放型発酵槽や密閉型発酵槽の他に、わずか1日や数時間で処理可能なプラントや、ボイラーで焼くだけのものなど実に様々なものでした。業者の説明にも設計書があったりなかったり、中には価格提示のないものまで様々でしたので、今後の機種選定に当たって少しでも参考になればと思い各社の対応を以下にまとめてみました。

1 設計書の有無

表1に示すように設計書がない業者は7/14社で、販売実績が無いか若しくは非常に少ないところと一致していました。このうち農家が興味を持ったものについては設計書の提出を求めましたが、結局提出はされませんでした。

また偶然かもしれませんが、約半年の短期間に廃業した業者が2/14社あり、これらも販売実績が少ないと思われる業者でした。つまり設計書の提出のない業者は実績や経験が少なく、施設機械の信頼性に疑問があるだけでなく、廃業や製造中止の危険性さらにはメンテナンス上にもマイナス要素を抱えていることを考慮する必要があると思いました。

表1 処理設計書にみる各社の対応

対 応	構成(社数)
設計書がない	7/14
設計書を要求しても提出なし	3/3
設計書はあるが設計に問題あり	6/7
積算の訂正を指示したが回答なし	2/2
設計書にランニングコスト非提示	2/7
ランニングコストの根拠不十分	4/5

2 設計内容

設計書が提出されたものの内、適正な規模積算をしていたのはわずか1社でした。他は何らかの問題があり、必要規模より過小設計しているものがほとんどでした。具体的な問題点は表2のとおりで、これらの不適切箇所を訂正するよう指示した場合も、訂正して提出した業者はありませんでした。過小設計は元々安価をアピールするためと思われ、訂正すれば当然見積もりが高くなってしまいますので、今思えば私の指示は元々不可能な話だったのです。

表2 規模積算上の問題

T 社	最終水分が設計書どおりにならない (戻し堆肥不可能) 発酵槽面積が不足している ハウス能力について冬季対策が示されていない
A 社	設計書どおりに戻し堆肥を使うなら面積が不足 オガクズを使っても面積が不足
I 社	戻し堆肥量が生産堆肥量より多い(戻し堆肥不可能) 堆肥舎の面積が不足
H 社	糞の量と水分を少なく設定している 分解率をかなり高く設定している(容積不足)

3 ランニングコスト表示

ランニングコストを提示したのは設計書のあるものの内5/7社でした。さらにその内、適正に積算されたものはわずか1/5社で、他社では提示があるものの積算根拠が不十分で判断困難でした。農家が興味を示したものについては再度詳しい積算を提出するよう求めましたが、提出されたところは1社もありませんでした。

4 PR度

比較の実績があり信頼もおける業者はどちらかと言えば説明がそっけなく、それほどPRに力を入れていないように思われました。逆に設計書もなく、実績も少ない業者の方が営業に熱心で、専門用語や聞いたことのない用語を用い積極的に宣伝を繰り広げる傾向があると感じました。これ

は今回の業者に限られたことかも知れませんが・・・。

◆酪農家の選択

アドバイザーとしては農家に各社の規模積算上の問題点やランニングコストの一般的傾向、また積算書がないものや不十分なものを信頼することは危険であることを理解してもらった上で、自分の経営に最も合っている施設を選んでもらっています。

その結果、多くの農家は堆肥舎や開放型発酵槽を選択をしています。しかし以下の理由で未だ決断出来ない農家もいます。

◆今後の課題

例えば施設整備のための十分な用地がなく、自然流下式牛舎で、その上畑作地帯のためモミガラが確保できない酪農家は、どういう施設を選択すればよいのでしょうか。設置面積の小さい密閉式発酵乾燥機でしょうか。いいえ高いランニングコストを払い続けるより、農地を買った方が結果的には安くつきます。しかしふん尿処理目的で土地を売ってくれる人はなかなかありません。

この解決策として今私たちが模索しているスタイルは畜産農家で水分調整若しくは1次処理を行い、意欲のある大規模の耕種農家で2次発酵とストックをする方法です。畜産農家は土地が少なくても可能な上堆肥が売残る心配も少なく、耕種農家は納得のいく堆肥ができ、自分のほ場にも近いから使いやすいメリットがあります。現在堆肥の利用先確保が大きな課題となっていますが、この方法だと耕種農家は堆肥を買うのではなく堆肥を生産する立場となるので、土づくりや有機肥料に対してもより能動的な意識に変わってくれるものと期待しています。